

5月11日（日）マルコの福音書1章40～42節

「イエスは深くあわれみ、手を伸ばして彼にさわり、「わたしの心だ。きよくなれ。」と言われた」（41節）

---

新改訳第三版以降「ツアラアト」と訳されていることばですが、第二版までは「らい病」と訳されていました。このツアラアトという言葉は、第三版のあとがきにもありますように、いわゆる不快表現、差別表現に関わるものを改定していこうとの意図に基づいて変更されました。それと同時に、聖書のツアラアトというヘブル語が厳密には何を表しているのかは今だに明確ではありませんので、新改訳聖書ではそのままツアラアトということばを用いています。いずれにいたしましても、ツアラアトに冒されたというのは、皮膚がツアラアトという「何かの原因により、人体の表面が冒された状態」ということです。そして、このツアラアトがいやされたということは驚くべき奇跡でした。なぜなら、人は決してツアラアトをいやすことができず、当時はツアラアトがいやされることは、死人が生き返るよりも難しいとまで言われていたからです。

当時のツアラアトに冒された人の置かれていた状況は過酷でした。ツアラアトという不治の病に冒されたという現実だけではなく、社会からも隔離され、いやしめられ、汚れた者として神殿への出入りも禁じられていました。実際に旧約聖書のレビ記の規定では、「患部があるツアラアトに冒された者は自分の衣服を引き裂き、髪の毛を乱し、口ひげをおおって『汚れている、汚れている。』と叫ぶ。～彼は汚れているので、ひとりで住む。宿営の外が彼の住まいなる。」（レビ記13章45、46節）とあるとおりです。それとともに、何らかの罪のゆえに神からの罰を受けたのだとの偏見も持たれていたようです。

その彼が、イエス様のみもとに来て、ひざまずき、いやされることを願いました。恐らくイエス様の驚くべきみわざに関するうわさはカペナウム中に広がっていたでしょうから、この男もイエス様のもとに来たのでしょう。イエス様は、社会から疎外され、人々からいやしめられていたこの人を深くあわれまれました。そして近づくだけでも汚れると言われていたのに、イエス様はこの人にさわって、いやされることにより、ご自身の力を発揮されました。

そして、このあわれみをイエス様は私たちにも現してくださいました。それは、私たちがどうすることもできない罪をその身に負い、罪のさばきを受けることで私たちが罪を赦され、罪から解放されました。あふれるばかりの愛とあわれみをイエス様は十字架を通して私たちに示してください、イエス様は罪によって傷つき、悩み、不安と恐れによってどうしようもない私たちの心にその御手をもって触れて、いやしてくださいました。そして、このイエス様のあわれみからもれる人は誰もいません。問題は、ツアラアトに冒された人のように自らの罪に気がつき、イエス様のもとに謙遜に進み出て、罪の赦しを願うかどうかです。

5月12日（月）マルコの福音書1章43～45節

「イエスは彼を厳しく戒めて、すぐに立ち去らせた。」

---

44節に「だれにも話さないように気をつけなさい。」と言います。本来であれば、イエス様によって癒されたことを少しでも多くの人に話すことで、癒しを必要としている人たちがイエス様のもとに来ることができればと思ってしまうかもしれません。しかし、イエス様がこの人にだれにも話さないように気をつけなさいと厳しく戒められたのには理由がありました。それは、物質的な利益のみを求めてイエスのもとに人々が来ることを望まなかったからです。イエスは、人々を癒すことが第一の目的ではなく、福音を伝えることを目的としていた（38節）のです。ですから、もし福音を伝えることが妨げられるようなことがあれば、イエス様ご自身が群衆から身を引かれることもあったのです。しかし「ただ行って、自分を祭司に見せなさい。そして人々への証しのために、モーセが命じた物をもって、あなたのきよめのささげ物をしなさい」と言われました。これは、レビ記14章1～32節の規定に従うことをイエス様がこの人に求められたのであり、イエス様ご自身は決してモーセの律法をないがしろにされたのではなく、むしろそれを重んじておられたことが分かります。しかし、厳しく戒められたにもかかわらず、この人は癒されたことを出て行ってふれ回り、言い広め始めたので、多くの人がイエスのもとにやって来ました。イエス様は、こうなることをご存じで、この人を厳しく戒めて、だれにも話さないように気をつけなさいと言われたのです。私たちは悪意からではなく、良かれと思って行ったことが主のみこころに反してしまうことがしばしばあります。だからこそ私たちは主のみこころに従うために主の御声を常に聞く必要があるのです。

また私たちは、教会でさまざまな活動を行う時に、最も大事な目的を見失ってしまうことはないでしょうか。それは福音を伝えることです。福音を伝えなければ、どんなに熱心に何かをしても、それは空しいことを知らなければなりません。すべてが福音を伝えるためになされるように祈りましょう。

5月13日（火）マルコの福音書2章1、2節

「イエスは、この人たちにみことばを話しておられた。（2節）

---

1章21節からイエス様がカペナウムでなさったさまざまなみわざが記されています。汚れた霊を追い出されたり、シモンのしゅうとめの熱病をいやされ、「イエスは、様々な病気にかかっている多くの人をいやされた。また多くの悪霊を追い出し」（1：34）とあります。そして40節からはツアラアトに冒された人からツアラアトが消え、きよくされるみわざを行いました。だれにも話さないように気をつけなさいと戒められたにもかかわらず、この人はその出来事を言い広めたので、イエスは表立って町に入ることができず、町の外の寂しいところにおられました。数日たって再びカペナウムに来られました。1節に「家におられることが知れ渡った」とありますが、イエス様はカペナウムに住まれていたと思われます。（マタイの福音書4章13節参照）そのようなイエス様に対するうわさが広まって、2節「それで多くの人々が集まったため、戸口のところまで隙間もないほどになった。」というのは当然だろうと思われます。その人々にイエス様は「みことばを話しておられました」（2節）このところからもイエス様ご自身もみことばを語ることを、とても大切にされていて、人々も喜んでイエス様のみことばの説き明かしを聞いていたことが分かります。「わたしはそこでも福音を伝えよう。そのために、わたしは出て来たのだから。」と言われたイエス様は、みことばを教えることにより福音を伝えようとしていたのです。このイエス様の姿から、私たちの福音宣教の中心には常にみことばがあるかを確認すべきです。それとともに福音宣教に携わる一人ひとりには、まず自分がイエス様の足もとで謙遜にみことばに耳を傾けなければなりません。自分がみことばを聞かないで、みことばを教えたり、福音の宣教はできないはずで

5月14日(水) マルコの2章3～5節  
「子よ、あなたの罪は赦された。」(5節)

---

「人々が一人の中風の人を、みもとに連れて来た」(3節)とありますので、担いでいたのは四人ですが、それ以外の何人かで一人の中風の人をイエスのもとに連れて来た可能性があります。しかし、せっかく連れて来てはみたものの、「多くの人が集まったため、戸口のところまで隙間もないほどになっていました」(2節)そのままではイエスに近づくことができませんから、イエスがおられるあたりの屋根をはがし、穴を開けて、中風の人が寝ている寝床をつり降ろしました。それに対してイエス様は、中風の人に「子よ、あなたの罪は赦された」と言われたのです。なぜここでイエス様は、この中風の人に対して罪の赦しを宣言されたのでしょうか。まず一つの可能性として、この当時の人々は病と罪が密接に関わっていると思っていましたので、罪の赦しを語られたのかもしれませんが。それとともに、ここでイエス様が自ら、神の御子として罪を赦される方であることを公に示された可能性もあります。それとともに、私自身が深く教えられましたことは、イエス様に近づくことから罪の赦しが始まるということです。聖書で言う罪人とは、神を離れ、自分が神のようになり、罪と背きの中に死んでいる人たちです。そのような罪人が、立ち返ってイエス様のみもとへ来ることから罪の赦しが始まっているということです。特に、「イエスは彼らの信仰を見て」とありますが、身体的な関係で自分ではどうしてもイエスのもとへ行くことができない一人の中風の人を屋根をはがし、穴を開けて、寝床をつり降ろして、イエスのもとに連れて来ようとした信仰、特にイエスならばこの中風の人を癒やして下さると信じる信仰と群衆のために近づくことができない中であっても決してあきらめなかった信仰をイエス様はご覧になられたのでしょうか。イエス様によって、「子よ、あなたの罪は赦された。」と言われた私たちでなければ、誰かをイエス様のもとへお連れすることはできません。そして、イエス様が、その私たちの信仰をご覧になって、「あなたの罪は赦された」と宣言される方があるはずで、この人はどうせ信じないからと思っている私たちのどこに信仰があるのでしょうか。むしろ、私たちの信仰はイエス様を失望させてはいないでしょうか。そして、祈って、家族・友人・親戚・同僚、そしてCSやキッズクラブ・エンゼルクラブに来ている子どもたちやご父兄をイエスのもとに連れて来るために私たちは信仰を働かせましょう。行いによって現される信仰をイエス様に見ていただきましょう。そしてその信仰をイエス様をご覧になって、私たちがイエス様のみもとへお連れした方々の信仰告白により「あなたの罪は赦された」と、イエス様ご自身から罪の赦しの宣言がなされるのを私たちも、ともに聞かせていただきたいと願われます。

5月15日（木）マルコの福音書2章6～8節

「なぜ、あなたがたは心の中でそんなことを考えているのか。」（8節）

---

7節で律法学者達は、心の中でイエス様は神を冒瀆していると批判します。彼らは、神以外の誰も罪を赦すことができないと信じていましたから、神ではない者が、罪の赦しを宣言することは、自分を神の地位へと引き上げる神を冒瀆する行為だと思ったのでしょう。さらにレビ記24章10～16節では、御名を汚す者は石打ちにより殺されなければならないと定められていますから、イエスは神への冒瀆により御名を汚した者として石打ちによる死罪にあたると思ったはずです。仮にもし彼らがそう思ったのであれば、本人に率直に尋ねればよかったのですが、心の中でそのように思っただけでした。

私たちは、心の中でいろいろなことを考えます。例えば心の中で喜びを表現することもあるでしょうし、人知れず悲しむこともあるでしょう。しかし、しばしば私たちはこの律法学者たちのように、口に出さないで、心の中で人を批判します。人をさばきます。特に、口で言っていることと心で考えていることが全然違うということがありうるのです。人の目から隠れている心において、律法学者たちのように多くの罪を犯していないでしょうか。神様は私たちの心をご覧になり知っておられるお方です。「人はうわべを見るが、主は心を見る。」（サムエル記第一16章7節）とあり、また今日の箇所においても、イエス様はすぐにご自分の霊で見抜いて、「なぜあなたがたは心の中でそんなことを考えているのか。」と律法学者たちに言われたのです。神様の前には、隠れている私たちの心の中にある罪も明らかにされ、それをもさばかれる時が来ます。そう考えますと、私たちは日々心の中で犯した罪をも告白して神様の赦しを得なければなりません。それと同時に、心は見えない部分だけにはないがしろにされがちですが、「何を見張るよりも、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれから湧く。」（箴言4章23節）とありますように、私たちはみことばを通して見えない心にも注意を払い、私たちの心が罪や悪しきものに支配されないようにしたいと思わされます。

5月16日（金）マルコの福音書2章9～12

「しかし、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたが知るために。」（10節）

---

律法学者たちが神をけがしていると心の中で言っていた理屈を見抜かれたイエス様は、ひとつの質問をされました。それは、「中風の人に、『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて、寝床をたたんで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。」（9節）というものでした。これは、それほど難しい質問ではありません。当然『あなたの罪が赦された』というほうが簡単です。なぜなら罪が赦されたかどうかというのは目に見えず、確かめようがないので、誰でも「あなたの罪は赦されました。」と簡単に言えますし、逆に『起きて、寝床をたたんで歩け。』と言ったとしても、中風の人に何も起らなければ笑いものになるだけだからです。

ここでイエス様は、「あなたに言う。起きなさい。寝床を担いで、家に帰りなさい。」と難しい方を選択されました。（11節）そしてこのイエス様のことばどおり、この中風に苦しんでいた人はいやされて、そこを出て行ったのです。なぜイエス様がこのようなやしのわざを行われたのかと言いますと、10節にありますように、「人の子（＝イエス様）が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに知らせるために。」ということ、すなわちイエスが神の御子であることを証しするためだったということです。病は罪の結果であると考えられていた当時のユダヤ人たちの文化にあっては、『起きて寝床を担いで、家に帰りなさい。』とイエスが言ったとおりに、中風の人がいやされて、そこを出て行ったということは、必然的にその人の罪も赦されたことを証ししていると考えられたということです。それと同時に、「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることをあなたがたに知らせるために。」との宣言は、罪の赦しを通しての地上における神の国の到来を告げることにもなったのです。

私たちは、イエス様が十字架で私たちの罪の贖い、完全な罪の赦しを通して信仰により罪が赦された者たちです。主は、私たち一人ひとりに権威をもって罪の赦しを宣言していただきます。そのことを私たちが心から感謝するとともに、罪を赦された私たちも通して周りの人々が神をあがめる（12節）ことを心から願わされます。

5月17日（土）マルコの福音書2章13～14節

「イエスは、道を通りながら、アルパヨの子レビが取税所にすわっているのを見て、「わたしについて来なさい。」と言われた。」（14節）

---

イエス様が選ばれた弟子たちは、漁師であったり（1：16～20参照）、取税人のレビでした。取税人は、ローマ帝国やヘロデのために働いていることでユダヤ人社会からのけ者にされたり、貪欲で不道德な者たちとして偏見の目で見られていました。このようなユダヤ人社会にあって取税人を弟子とすることは、普通に考えればデメリットの方が大きいと思われますし、イエス様まで偏見の目で見られかねないリスクがあります。しかし、イエス様の選びに関しては特徴的なことがあります。それは、当時弟子になって師に教えを請うという時には、弟子の志願者の方から師の方へ出向くのが一般的でした。しかしイエス様の場合には、師であるイエス様のほうから声をかけられ、ご自分に従うようにと招かれています。つまりイエス様のほうが主導権を取って弟子たちを招いているのです。そこに人の理解を超えたイエス様のみこころによる選びがあるのです。

もう一つが、漁師であったペテロやアンデレ、ヤコブとヨハネの場合もそうでしたが、取税人レビもイエス様の招きに応じて、イエス様に従いました。それは彼らの信仰から出たことです。イエス様に従ったからと言って彼らの生活や将来が保証されていたわけではありませんでしたし、もしイエス様の招きに従わないで、ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネがそのまま漁師を続けていたら、そのまま漁師としての生涯を送ることになっていたでしょうし、レビもイエス様の招きに従わなければ、そのまま取税人として一生を終わっていたはずですが、彼らはイエスに従う道を選びましたが、そのことが結果的にイエス様の弟子、将来的な使徒としての働きにつながっていったのです。誰しもイエス様の招きに答えるには大きな決断が必要です。しかし信仰をもってイエス様に従ったなら、イエス様が責任をもってすべてを最善に導いてくださいます。そして何よりもイエス様に従って生きることほど栄光に満ちた生涯はありません。そして召されたお方は真実ですから、信仰によりイエス様に従う歩みを始めた私たち一人ひとりを見捨てることなく、最後まで責任をもって歩みを導いてくださいます。それも主の私たちに對する変らない大きな恵みです。